白雪姫　２００６

第１幕　お城のお妃の部屋

お妃　　「はっはっっはあああ！ああ愉快じゃ愉快、これが笑わずにおられようか。あのにっくき白雪姫は、もうこの世にはおらんのだ。さあ、鏡よ、今こそ声高らかに我が名を呼ぶがいい。この世で一番美しいのは誰じゃあ？」
かがみ　「はい、それは……白雪姫でございます」
お妃　　「なああにぃ！あやつめまだ生きておるのか！狩人め、さては白雪姫を殺さなかったなあ。かくなる上は、白雪姫を我が手にて亡きものにしてやるぅ」

　暗転

第２幕　森の場面

老婆　　「ほっほっほ、美しい白雪姫。さあ、このリンゴ一ついかがじゃな」
白雪姫　「まあ、おいしそうなリンゴ。でも、おばあさんはどうして私の名前を知っているの？」
老婆　　「そっそれは……そなたは美しくて有名じゃから……それでしっておるのじゃあ」
白雪姫　「まあそんなこと無いわ。おばあさんたら、お世辞がお上手ね。私のことどこで知ったのかしら」
老婆　　「そんなことはどうでもよい。とにかくこのリンゴを食べるのじゃ」
　一口食べて、その場に倒れる。
老婆　　「ふふふ、ははは、わっっはっっは」

第３幕　森の場面（ステージ前）

小人１　「さあいくぞ」
小人全　「おー」
小人１　「おれたちゃ、みんな」
小人全　「森の小人」
小人１　「おれたちゃみんな」
小人２　「働き者」
小人全　「うん、うん」
小人１　「おれたちゃみんな」
小人３　「力持ち」
小人全　「うん、うん」
小人１　「おれたちゃみんな」
小人４　「さわやか」

小人全　「うん、うん」
小人１　「おれたちゃみんな」
小人５　「やさしいぞ」
小人全　「うん、うん」
小人１　「おれたちゃみんな」
小人６　「貯金が大好き」
　　みんな、ガクっ
小人１　「おれたちゃみんな」
小人７　「白雪姫が大好き」
小人全　「そうだ！そうだ！」
小人２　「白雪姫のあの優しい声」
小人全　「うん、うん」
小人３　「白雪姫のあの細くて白い指」
小人全　「うん、うん」
小人４　「白雪姫のあの優しい歌声」
小人全　「うん、うん」
小人５　「白雪姫のあのいいにおい」
小人全　「うん、うん」
小人６　「そして、白雪姫は……」
小人全　「白雪姫は？」
小人６　「貯金が上手！」
小人全　口々に責める
小人７　「あっあれは白雪姫」
小人１　「白雪姫、どうしたんだい？」
小人２　「白雪姫は死んじゃったの」
小人３　「そんなことあるわけないじゃないか」
小人２　「だって、動かないよ」
小人４　「うわあ、やっぱり死んじゃったんだ」
小人６　「ごめんよ白雪姫、君の朝のパンを一個とったのは僕なんだよ！本当のことをいおうとしてたのに！」
小人７　「でも待って、息はしてるみたいだよ」
小人１　「じゃあ眠っているだけかもしれない」
　みんな揺すって起こそうとする
小人２　「ああ、やっぱり駄目だ」
小人３　「たしか伝説には、王子が通りかかって、白雪姫を目覚めさせてくれるとあるよ」
　王子登場
小人４　「王子、助けてください」
小人５　「おいらたちの白雪姫が眠りから覚めなくなっちゃったんだよ」
小人６　「おいらの貯金全部あげるから、助けてくれよう」
王子　　「わかりました。やってみましょう。」

王子はひめにかおをちかづけるが

王子　「どうやら、姫は、強い魔力によって眠らされているようです」

小人１　「どうすればいいんですか？」

王子　「魔法を解くには、お城に住むお妃に魔法を解かせるしかありません」

小人２　「それじゃあ王子様、お願いします」

王子　「私には無理です」

小人３　「そんなあ！」

王子　「私だけでは無理なのです。みなさんが力を貸してくれれば、あるいはなんとかなるかもしれません」

小人４　「俺たちが……」

暗転

第４幕　城の中

王子　「お妃、あなたですね、白雪姫にひどいことをしたのは」

お妃　「ほほほ、そうよ何がいけないの？」

小人１　「俺たちの白雪姫の目を覚まさせるんだ！」

お妃　「お断りだね！」

小人６　「たのむよ、おいらの貯金全部あげても良いから」

お妃　「何をくだらないこといってるんだ、おまえがもっているようなちっぽけな金などほしくはないよ」

小人３　「じゃあ、なにがほしいんだ？」

お妃　「世界一の美しさだよ、白雪姫さえいなけりゃあ、わたしはこの世で一番美しいのさ。白雪姫は、一生眠り続け、そしてそのまま死んでいくのさ」

小人全　「なんてひどいことをするんだ」

王子　「お妃、あなたはたとえ白雪姫が居なくなっても、決してこの世で一番ではありませんよ」

お妃　「なにをいう！」

王子　「この小人たちを見なさい。この者たちは、白雪姫を愛してる。でも、それは白雪姫の姿が美しいからではない」

小人１　「そうさ、白雪姫は、俺たちのぼろぼろの服をみて、かわいそうだって、新しい服をつくってくれたんだ」

小人２　「それに冬の寒い日でも､俺たちのために手を真っ赤にして水をくんでくれるぞ。」

小人３　「やな顔一つせず、俺たちの仕事で汚れた服も洗濯してくれた」

小人６　「おいらが、白雪姫のパンを食べちゃってもぜったいおこんないんだぞ」

小人４　「白雪姫は俺たちのお母さんみたいなんだ」

王子　「お妃、小人たちが愛しているのは白雪姫の姿の美しさではないのですよ。いってみれば心の美しさなのです。心が醜いものの姿がどんなに美しくても、それは人から愛されるものなのでしょうか。いったいその美しさに何の意味がある

のでしょう。人の本当の美しさとは、心のことなのではないのでしょうか」

お妃　魔法を解くような仕草「もりにかえるといいわ、白雪姫は目を覚まして居るはずよ」

小人たち喜んで森へ向かう

王子　「お妃、ありがとうございました」

お妃　「王子、私は今からでも心の美しいものになれるでしょうか」

王子　「あなたならきっとなれますよ、お妃」

お妃　「白雪姫にあったら伝えてください、いつでもお城に戻ってきていいと」

閉幕